産婦人科

巽　啓司

産科的合併症は経過が急で母体・胎児に重篤な異常をきたすことも多い。またそれ以外の合併症も、非妊娠とは異なる病像を呈したり妊娠経過に重大な影響を与えたりすることがよくある。近年、出生率の低下とともに妊娠出産年齢の高齢化等により、いわゆるハイリスク妊娠の割合は増加の一途をたどっている。当院産科でもこの傾向は顕著であるが、異常なく経過した妊産婦だけでなく様々な合併症をもった妊娠にも、できるだけ自然なお産を体験してもらえるよう努力している。子宮内の胎児の状態はブラックボックスを扱うようなものであるが、胎児心拍モニタリング、超音波断層法、パルスドップラー法等により子宮内の胎児の状態を間接的にではあるが推測することが可能になってきた。新しい知識・技術を駆使して個々の症例に応じた適切な個別のリスク管理を行うことを通じて、より適正な診療体系を作っていくことが当科の基本目標である。また小児脳神経外科グループと協力して、水頭症など先天性中枢神経奇形をもつ胎児の出生前診断と治療を数多く手がけて日本周産期新生児学会で報告しているほか、AIDS診療拠点病院として、HIV/AIDS合併妊娠の管理にも積極的に取り組んでいる。

当院の婦人科診療の中心は「がん」であり、入院患者の多くは悪性腫瘍患者である。また大阪における子宮がん治療の草分けとして出発・発展し、全国でも屈指の婦人科がん治療施設として、世界婦人科連合（FIGO）の悪性腫瘍登録施設（わが国では5施設）の一つに選ばれている。また毎年日本産科婦人科学会婦人科腫瘍登録を行い、わが国における婦人科腫瘍診療の発展に貢献している。さらに、「がん患者の妊孕能や日常生活機能の温存」、「進行がん患者に対する化学療法を含めた集学的治療の効果」などを当面の課題として、手術術式の改良、手術適応の見直し、最適な補助療法の組み合わせの検討等を進めており、日本産科婦人科学会や日本婦人科腫瘍学会等での演題発表や論文作成を通じて、その成果を順次公表している。一方、子宮筋腫や卵巣嚢腫等の良性疾患も取り扱っており、これらの疾患の治療においても、術後後遺症の最少化、必要な機能の温存を第一義とした治療を旨としている。

【2014年度研究発表業績】

A-0

Masui K, Yoshida K, Takenaka T, Kotsuma T, Tanaka E, Tatsumi K, Yamazaki H, Yamada K.
：A novel minimally invasive technique of high-dose rate image-based intracavitary brachytherapy for endometrial cancer using a single fine and soft, flexible applicator.Anticancer Research. 34(5): 2537-40, 2014.5

Yoshida K, Yamazaki H, Takenaka T, Kotsuma T, Miyake S, Mikami Ueda M, Yoshida M, Masui K, Yoshioka Y, Uesugi Y, Shimbo T, Yoshikawa N, Yoshioka H, Aramoto K, Narumi Y, Yamada S, Tatsumi K, Tanaka E.：Preliminary results of MRI-assisted high-dose-rate interstitial brachytherapy for uterine cervical cancer.Brachytherapy. 14(1): 1-8. 2015 (Epub 2014 Sep 15.)

Kanayama N, Isohashi F, Yoshioka Y, Baek S, Chatani M, Kotsuma T, Tanaka E, Yoshida K, Seo Y, Suzuki O, Mabuchi S, Shiki Y, Tatsumi K, Kimura T, Teshima T, Ogawa K.：Definitive radiotherapy for primary vaginal cancer: correlation between treatment patterns and recurrence rate.Journal of Radiation Research. (Epub 2015 Jan 22.)

A-3

松井浩史、大宮英泰、高見康二、三嶋秀行、伴建二、児玉良典、栗山啓子、関本貢嗣：卵巣顆粒膜細胞腫術後11年目に行った肺転移切除。胸部外科、67(10) : P.904-907、2014年9月

浅岡忠史、宮本敦史、原田百合奈、種田健司、関本貢嗣、中森正二：妊娠26週で腹腔鏡下胆嚢摘出術を施行した再発を繰り返す急性胆嚢炎の1例。日本臨床外科学会雑誌、75(10)：P.179-183、2014年10月

巽啓司:常位胎盤早期剥離 —発症予知と対策— 娩出時の母児救命 IUFD の取り扱い -経腟分娩か帝王切開か-。産婦人科の実際、63(12) : P.1979-83、 2014 年 12 月

B-3

谷洋彦、堀江昭史、杉並興、松本久宣、宮﨑有美子、小西郁生：胚着床部観察の目的で施行した子宮内腔造影の有用性について。第 66 回日本産科婦人科学会、東京、平成 26 年 4 月

高橋宏典、弓削主哉、松原茂樹、大口昭英、桑田知之、薄井里英、松本久宣、佐藤幸保、藤原浩、岡本愛光、瀧澤俊広、鈴木光明：CD44 を介した絨毛外栄養膜細胞の浸潤調節機構の解明。第 66 回日本産科婦人科学会、東京、平成 26 年 4 月

巽啓司、田中稔恵、寺田亜希子、木田尚子、橋本佳奈、種田健司、伊東裕子、伴建二、頼裕佳子、岡垣篤彦：腹部大動脈瘤に固着した傍大動脈リンパ節転移を認めた子宮体癌

の 1 例。第 56 回日本婦人科腫瘍学会、宇都宮、平成 26 年 7 月

岡垣篤彦、定光大海：GIS 連携アプリケーションの作成による南海トラフ巨大地震の医療機関の被害想定作成および DMAT による急性期医療対応計画策定。第 16 回日本災害情報学会、新潟、平成 26 年 10 月

松本久宣：子宮頸癌術後放射線治療後に生じた外腸骨動脈尿管瘻の 1 例。第 68 回国立病院総合医学会、横浜、平成 26 年 11 月

伴建二：当科における子宮悪性腫瘍に対する単純子宮全摘出術の実際。第 68 回国立病院総合医学会、横浜、平成 26 年 11 月

橋本佳奈 : 傍大動脈リンパ節転移との識別を要した左腎静脈瘤合併卵巣胚細胞腫瘍の 1 例。第 68 回国立病院総合医学会、横浜、平成 26 年 11 月

木田尚子 : 妊娠中に感染を起こしドレナージを要した Gartner 管嚢胞の一例。第 68 回国立病院総合医学会、横浜、平成 26 年 11 月

B-5

岡垣篤彦：地理情報システム（GIS：Geographic Information System）と連携する大規模災害対策ソフトウエアの作成。ファイルメーカーカンファレンス in 大阪、大阪、平成 26 年 7 月

岡垣篤彦 : GIS ソフトウエアを使用した大規模災害救援ソフトウエアの制作と災害救援プランの策定。Medical Open Source Council 7、京都、平成 26 年 10 月

寺田亜希子、矢口愛弓、田中稔恵、木田尚子、橋本佳奈、伊東裕子、伴建二、頼裕佳子、松本久宣、岡垣篤彦、巽啓司：当院における卵巣癌および卵巣境界悪性腫瘍に対する妊孕性温存治療。第 131 回近畿産科婦人科学会学術集会、大阪、平成 26 年 10 月

岡垣篤彦：ファイルメーカーによる電子カルテ入力系の有効性。-救命救急外来の電子カルテ運用、入力効率と職種権限問題への解答-。日本ユーザーメード医療 IT 研究会全国大会、福井、平成 26 年 11 月